らぬものであるか否かと云ふことは大に疑はざるを得ない。否吾人は興味を以て基礎として居る遊戯的活動をば徒に勤勞化して基礎なく興味なき努力の偶像たらしむることは寧ろ極めて有害なことであると思ふのである。何となれば斯の如き不自然なる勤勞の結果は決して興味と努力とを結合せる自發的勤勉と云ふものを養成する必然の順序と見ることは出來ないからである。

好し數歩を讓つて幼稚園の手工をば教科としての手工と同視するとした所で、其取扱方は如何にす可きかと云ふ問題は何に因りて解決す可きか、今日の所教授學の諸法則は決して幼稚園の作業を指導するに恰好のものではない。教授學の法則は應用すれば、する程幼稚園の本旨本領に遠かり行くことは實際吾人の常に經驗する所である。此場合に於て之を遺感なく指導し得ることは、之を遊戯の見地より説明することである。即ち幼稚園に於ける保育事項としての恩物は遊戯的手工として見る時に於て尤も完全なる理論的解決を得るものである。

幼稚園に於ける幼兒保育の實際（承前）

某女史

(3)談話

元來幼兒は談話を好めども當組幼兒が之を喜ぶことは實に甚だしきものなり。殊に第二學期の中頃より第三學期に至りては談話者の技倆の巧拙に關らず殆んど飽くことを知らずして聞く風あり。三十分より四十分に渡る談話をもよく注意して聞くこと常なり、現在の所何物よりも談話を喜ふ風あり。

談話の材料は保育要項にあるものを中心とし標準としたれども其他に用ひたるものは少からず新に用ひたる談話の題目

猿の話
猿ばしの話
○帽子賣と猿の話
猿の魔物語
梅の魔物語

○栗山の話
海水浴の話
行啓につきての御話
龜の話（魔物語）
孝子の話（水戸黄門の傳）
○天の神の話（婦人と小供）
粉屋の鼠（同）
○鼠の戰爭（少年）
○鶏の魔物話（兒童）
○鶏の功名（小波山人おとぎ話）
旅順の海戰
寶袋（婦人と小供）
一寸法師の話（唱歌による）
○印を附しなるは就中幼兒に興味ありしものなり又保育要項中の談話中幼兒に興味多く價値多しと認めたるものは再三反復して話したるが今其種のものを擧ぐること左の如し

金太郎
羅生門
花咲爺

浦島太郎
桃太郎
而して本學年の終に於て幼兒に畫紙と鉛筆とを與へて何にても今迄きゝたる談話の畫を描けと命じたるに其決果は左の如くなりき（畫の成績別紙）

羅生門の話　三（男三）
一寸法師の話　七（男一女六）
旅順の戰爭　四（男）
熊谷直實　二（男）
宇治川　一（男）
桃太郎　十四（男七女七）
兎と龜　四（男二女二）

鼠のいくさ　十一（男三女八）
獅子と鼠　一（男）
猫とかなりや　一（女）
櫻井の驛　一（男）
牛若丸　二（男）
金太郎　一（女）
八藏と柿　一（男）

幼兒が自ら談話する練習はあらゆる機會を利用して之を勉めたるが時に時間を定めて幼兒に思ひ〳〵の談話をなさしめたり

月曜の朝には土曜日より日曜日にかけての經驗を語らしめ其他の休暇後にも同樣の取扱をなし手技の場合に特に知れる兒をして知らざる兒に說明せしめ

欠席の後には自ら其理由を話さしむる等のこと

は常になす所にして實際の事に當りて其思想を發表せしむることに勉めたり

天長節、紀元節、皇后陛下御誕辰祝日、四方拜等の佳節を利用しては嚴正なる辭令の練習に當てたり

又或繪を示して想像を以て其話をなさしめ題目を與へて知れることを語らしめ時には又花、鳥、獸等幼兒に親近なるものにて十分に同情し得べきものを選みて幼兒をして自ら其物たらしめて一人稱の談話を試みしめたることもあり此の如くして幼兒は不十分ながらも兎に角進んで自己の思想を發表せんとする傾と其術とに著しき進歩を與へたることを信ず

(4) 手技

手技の配當は保育要項によりたれども第二學期より縫取を始めたるを異りとす

積木

積木は學年の全體を通じて用ゐ一週二度か一度の割合としたり而して常に飽くことなきものなり

第一學期の初めに於ては

正方體 四個　大なる三角 四個
長方體 四個　薄き四角 四個

を貸し與へ漸次增加して第八週に於て

正方體 六個　薄き四角 四個
柱 四本　長方體 四個
大なる三角 四個　小なる三角 八個

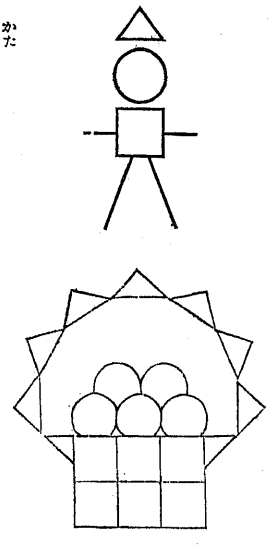
となし始めて一全體として箱に納めしめたり、小さき三角四個を合して正方體となすことは幼兒にとりて甚た困難なることなりし樣にて夏期休暇の前始めて全組の幼兒が補助なくして之を一まとめに成し得るに至りたり

豫定の材料は早く終りて第三學期に至りては大概幼兒の隨意につましめ保姆之を批評し補足したり

積方を授けたるものゝ中にて隨意の際よく幼兒に積まるゝものは汽車。船。風呂。橋に郵便函等にして幼兒の工夫によりて成るものにて最も多くしかも各種に積まるゝは電車なり

板並

變化に乏しく幼兒の思想が之によりて制限せらるゝ傾あればにや一般に幼兒は多く好まず殊に第二學期の始頃は其傾著しかりしを以て暫く貸し與へざりしこともありしが第三學期に於ては又やゝ之を好むに至りたり之を用ひしむる方法上其原因と認むべきことは別に發見せず又板と箸環とを並用する時に甚だ興味あり例へば○を顔とし△を笠とし□を服とし||を足とし又手とするが如し



畫き方

畫き方は手技の中にて最も幼兒の喜ぶものにて又價値多きものと思はる多く其隨意に描かしめ保姆が注意所々に加ふるに止めたるが又常に室内の裝飾として掛圖を用ひ之を取り代へ又略畫を描きて壁側に掛け置き自ら其描き方を知らしむる樣勉めたり但し略畫を示すにつきては又實物が幼兒の思想界にあるものを材料とすることを忘るべからずとせり然らざればこは住々無意味に陷りて却りて誤解の原因となることありたるを以てなり

畫紙は通常十六分したるものを用ひたりしが第三學期に於てシャトル博覽會に出品の爲とて八ツ切の紙を用ひて描かしたることをしば〳〵せり幼兒は後者にもやゝ慣れて自由に其紙を使用し得るもの多きに至りたれども尚ほ八つ切よりは十六切位に描かしむる方一般には手ぎは宜しき樣なり

色鉛筆の使用は時々にしたりしが幼兒の色彩の配合に關する考は次第に進歩發達して最初は徒らに赤青を塗たてたるが次第に考へて美はしき清楚なる取合せをもなす者あるに至れり色鉛筆は經濟の許すかぎり使用せしめたきものなり「消しゴム」は一般に使用せしめず幾度も描き改めて其手の練習に資せんことを理想とすれども

幼兒の發達するに伴ひて往々之を要すること實際に之あり當組幼兒も第二學期の末より三學期に至りて殊に描き方に勝れたる方の幼兒が之を要求すること度々にして又消し與ふる必要あり を認むる場合も多かりしを以て保姆の手に之を所持し時に應じて消し與へたり

畫き方は第三學期に於て著しく發達し臨畫、寫生畫をもなし殊に密畫を畫くものさへ出來たり

縫取

第二學期の終二週間より之を加へたり

最初は一針毎に糸をミゾより拔き去るもの糸をもつらす者多くして甚た困難なりしが漸次針の使用は巧みとなり今は只其縫取り方の順序を會得せしむることにのみ注意すれば可なるに至れり

縫取のみにても男女兒共之を喜べども亦之に畫き方剪紙等をまぢへ用ふる時は更に興あり糸の端の結ひ玉を作り最後に糸の「トメ」をなすことは大方保姆の手によりてなすなり

剪紙

初はきりたる紙を與へてはらしめしが第二學期より鋏刀の使用を初めしめたる家庭に於て曾て未だ之を用ひたることなしと云ふは三人のみにて他は多少の練習をつみ居たりされど未だかたきもの綿密なる形を剪るに通ぜず與へたる紙を全く反古として泣き出すものもありしが漸次練習をつみて隨分巧みなるものも出で來たり、花鋏の如きものをも自由に使用し得る者も二三見えたり

剪紙の練習として古新聞を利用したるが思ひの外宜しき結果を擧げたり幼兒は家庭にてはなか〳〵古き新聞如きに滿足するものにあらざれども幼稚園にては全く物めづらしき爲にや之を喜びて一ページの新聞紙は三十分間の保育材料となりて彼等は各自任意の紋形等を作るほか又其紙上の文字をきりぬき挿畫をきりぬきて飽くことを知らず

紙織り

材料の都合によりて最初より九行十行のものを用ひしめたるが更に困難を感ずることなかりし

を以て十三行にまで及ぼしたり出來上りの美はしきを以て幼兒は常に其方法よりは寧ろ成績を弄びて樂しむ風あり材料には美麗式のものを取り營生式のものには至らざりき又此手技に於ては常に其色の配合に注意せしむることをつとめたり

紙くみ

之も成績の美はしきを喜べとも仕方は極めて個人的に導くにあらざれば會得しがたきもの多し色の配合に注意する便多きこと織紙に等し

紙摺み

第三學期に於て著しく幼兒の興味を增したる樣にて自由遊にも白紙を取り出して自ら之を樂しむ風ありき敎へたるもの、外菖蒲、蛙、風船、オルガン、トンボ、馬等むづかしきものをも摺むものあり

摺み方は當組に於ては一般に女兒の方手ぎれいなり

豆細工

豫定の材料は敎へたれども寧ろ幼兒が任意の製作の方成績は優れたる樣なりつなき方と連合してなさしむることあり紙くみとも合してなしたることあり

粘土細工

當組幼兒が得意の手技にして豐かなる彼等が思想と奇拔なる工夫力とは制限せらるゝことなくして其製作品に現はれ成績甚だ宜し

粘土の材料としては勿論保育要項によりたれども球、圓柱、正方體、盆形の如き基本となるべき形のみを十分に練習せしめ其他は只之等の形の應用法を一二示したるのみにして形式を授くることを少くし自らの工夫に委ねそを批評し訂正することに專ら盡力せり而して此方法は其効果を著しくしたるが如き感あり

保姆は又常に此粘土遊を以て畫き方と並びて手技中の價値多きものと認めたるを以て幼兒の好むがまゝに第二學期には大抵毎週二回之を使用し十一月に入りても尙ほ暖かなる日には之をなさしめたり

以上手技に於ける幼兒の成績は別に之を保存せり

育兒訓

一、菓子や密柑を以て子供の心を釣り、善事を勸め、惡事を懲すべからず。

一、憤らした儘で子供を寢床に入るゝは最も惡しき事と知れ。

一、子供に強い光線を見せ、或は化物の話をすべからず、殊に就褥前に然りとす。

一、五歲未滿の子供は、決して動搖木馬に乘らしむべからず。

一、突然聲を擧げて、子供を吃馬せしむることなど注意すべし。

一、動擧の靜肅と食物の淸淡は、小兒の身體と精神を健かにする基なり。

一、些細な事を一々責むべからず、此を爲せよ、彼を爲せよ、开麼事をなす勿れと一々叱言を云ふべからず。

一、母親の溫かくして樂しき心は、陰鬱なる世界を變じて、光輝ある樂園となす。

愛情と子女の養育

樂天子

凡そ人の母たる上は、必らず子女あるを常とします、而して苟くも子女あれば之を養育して生長せしめなければならぬ、けれども兒女の養育も若し愛に溺れて、威嚴を欠かは、終には放縱無賴の徒となり易い、然れども親として子を養ひ育つることは、今茲に多言せずたゞ最も注意すべきは繼子の養育である、自己の生みたる子は之を愛するも先妻の子は、無情に之を待遇して、世人の非難を受くるものが多い、先妻は不幸にして死亡するか、離緣するときには、後に殘されたる子女は、實にその恃む所を失ふものである、故に繼母にして慈愛深かく之を養はゞ、彼れもまた眞の母のごとく之を敬ひ事ふべきも、若し陽に慈愛を粧ふて陰に之を憎み、已れの眞正の子と先妻の子との間に區別を設くるあらば其の子は之を怨むべく世人は之を擯斥するに至るのである、元來昔は繼母なるものは必らず繼子を慈まざるものゝ如くに思ひ、子